閑度雜談

中

15
1259
2

15 1259 2
1満 2243 2

閑度雑談中巻

目録

長門社鬼丸
千本乃山伏
角力の喧嘩
狗猫乃子を育て
宮津城者人
年賀追悼
美猴の禁令
二人社猟師
拙医の薬
孫坂村嵐塚
伊賀月の瀬
市村条右郎

江戸乃庚義
高山れ歌

京師松川
農民連岔

[印]

閑度雑談中巻

○長門の國乃鬼丸といふ角力とり江戸より都にのぼる道すがら
くだりの座頭にゆきつれしが千両の金をかくしもてるとさとり
けれは其の坐頭をすかしてこゝろみて邪なる心起こしける
ろうくをしつゝ坐頭が金を守るに心をつけてよき便
をまちけれど坐頭も用心ふかくさらにすきまもなくその老をさる
しばらくとゞめんとし大悪心を生じひまをうかゞひけるうちにはやくれ
あとさきうちつれてゆくほどに鈴鹿山にいたりつゝ日すでに

傾く、彼の人、居ながらにして、鬼丸いまだ手時なりし、坐敷と
うへなる木ごちのうげを引のけ、一刀みと切つくる、坐敷そうに
かくれ、急ぶ居ながらまくらをいつくしくうつくしくいへる、
口ぶそこしにしたりし深紀仇ふりぐ、まろふ殺害せしに、
金をうばん、さちなべし、今ハのぐるべきなれバいさぎよく死
しく、金を拾ひ、ふべし、生くハ盲目となる、死もまさ
るべきなり、されバ、冥途も苦悩ならんと、かなしく
拾ひ、ふるまふ二句の経文ありそふ授けゆべし、

ゆゑ追福のこゝろよ夜ふかく、思ひ出のふでとり高あり
しかるべく、手功徳にしたがく、必悪業消滅し極楽に生べ、
ちゝはゝ恩人とこそ拾へ、いとぐうこゝやうの
人、そもまさ、我へ報謝ものこそ、ふけ、ものこゝろ
しき孝、涙こもふりひけるふぞ、鬼丸もちそんよりはぐるこ
ろ、今ちゝ悔をゆるぶ、ちそんなし、ちゝくハ遺托のゆた
いこそ怠なくけるむべ、いそぎ其文とうづけられよ、いと
坐頭ちゝ、その文ハ、ふいろくさんのこゝしんハ、ちゝこんに

きぐるん、うんなり、うく記怪ひろひよひ終り息さえめ、鬼丸
急に金をとりく怪めて、うりいく坊主の御り留
まりあめかる悪人なり、座敷のうえ事、れそろしく思ひ
ん、遺言とうく、やそ日夜いくびるく、そひ申こ事、
うの小ひろくさんの文をとるけるときく人何ものやんと
ひやしく、まさ、友とく交さしの、手放とふひれば、あれいとき
經文なり、ひる人ものぐりしとあ人なと高
にとるふうくく日とへしく、此事　官にきちけるよ、

官の長、んさくて、あそくよ鬼丸ゞ名ときくしゃくよ、長門の鬼
しゆ角力人なりしけ、ばそ者とく來ふく、やゞく鬼丸とかゝる来、
官長召見くいつく、翌日前鈴鹿山へく、瞽老とろやくこのひろをれ
汝なりとしる、速よ自首ゝべしと、鬼丸ろうくいれ、ワれ人をろしふる
るのかしんゞなるべしとゆ官長大よ如ろ此しくふるぞよ汝が口ろ、鈴鹿
山の盗ハうれなりと、日夜とく、ちばく、游ときく、ゆるふいき俄にろをとう人、
いつくろや何ぞや汝つるのよ、小ひろくさんに、鈴鹿山なり、なるべんハ盗人ちやくんの
きぐるんとハ長門の鬼丸とゆ文字なりゆ、なるもよの瞽老ハ智なるこのあく、

汝が一丁字をもちゐずして、愚蒙なるを憐れみ、実をもつて防ぐべき
盗賊は汝なるものと早くいつはりけるにんそう、往文なりといつて、
かの二句と汝がはきものを人、音讀みとくさづけ、我とワロウを罪と
うれさせるものなり、はるかに天誅のがれ所なくして、
ちりぢりにふ、瞽者はけるれ、かくいつてを死る身をとくとく、
手伝を復し、ぞうう怨魂と慰るものなりいかんぞ速ふ白狀
しその罪につくべしと、儀然なるあるべきに、鬼丸その明智
あるにうし、地上に伏してく瞽者を殺し、金をうばひ、及手遣托

を受しものどもはずして、白狀ふかやうにかの死
刑ふ処せられ、ゆるのは余ぶ初にて、母はそのふかやうにいと面
白きものふ思ひしに、年つく後、母のはくまひしはふと初きて、
ものを話とゆうく、面をうりれ、わるくにとして舌切雀などのごく、
懲死のごとくく、子どもと義別の端ともなり、まるなどさ
めしをたれがしくはたらかせのきをかべしとちうさま
へて

○ものか諸侯は封内衆多ふうり、農民町人義奏とぬき

衣服ハ、ゆるゝ分ハ、ハ、ちまく禁止ゆるゝ、ハ、ちまく
ハ、ゆるゝ、かとやまぎらゝ、ハ、藩臣ハ内ゝ策と成て封内ゝ
ゝ、農民町人ゝ、紬以上のもの、決して着ぬ、ゝ、
ちまきまぐ持来て美服を勿ちとゞゝ、ハ、恐義なゝ
ゝ、ハ、ゝちきゝて猥ハ、着ぬ、ゝ、ゆるゝ、なの、朝ゝ、ゝ人
用ゝ、ゝのハ、今度仰出ゝ、ゝ、紬以上のもの、ゝ、禁
ぜゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝのハ、厳科て処ゝ、まぐゝ、来
ゝる衣服をゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

急に禁ぜゝ事なれとゝ、富ゝのゝ、俄小美服を
ゝ、ゝ、ゝ、以前ゝ、招来て、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、各衣服と役所ゝ、ゝ、ゝ、役人ゝ、其衣服ハ裾乃
ゝ、大なる改め印をおしてあるゝ、流ゝ、
服ゝ、ゝ、ゝ、公儀ゝ、ゝ、小吏数人知ゝ
ゝ、ゝ、美服ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、役所の印の有無ゝ、改めゝ、ゝ、大ゝ
ゝ、別ゝ、女ハ甚ゝ、ゝ、ゝ、顔ゝ、ゝ、汗ゝ、ゝ、

ふけうり、うつくしび役所孔ほうとうけし美服と美をるのなく、衣服の奏をなくまりぬ、まつふしてひかるふどで時とさぐ人の智術乃うつみなるものといべれらと、ゐる人うつくしし、

○千本某のみふきらる山伏ぐづうつくしく、ひが身の死ぬと二十日餘れまへふまりうりいまハえぐづうの命なれば、物うつくしかふらせん、いぐんのまふ樂うくまるんものし、思ひけぐでん、それまり日夜酔酒とのし、美艶をらうん、妓館にあそび、娯樂をかいまふなせしうば、金錢を論なし、家資をとぐくうりけくしぬ、

さふど程なく死ぐれ身なれば、後をうれるんいさうなく、親疎とうそど、貧寡と論ぜど、金錢をかりくはひうくしけれ、ふトしうためる死ぬふいうくハ、実ハ錢撮米もなくありぬ、

然ども毎日ちうふ死ぜど、そのの日とうそ恙なし、飢渇なうぐうふ、二三日過めふぐ中くく死ぐれやうふうぐど、今ハ一滴もかうぐをうなく、又ひかをほうる人、日ごふ來てつぐひくなめうくハ、命ひうくも世とわうるぐれ、舟も橋も絶めれば、いうそうとせんすべなく、ほのようづうう溢く死くうると、千山伏ぬ

まゐる人のつゝみ、

○余がまゐる人、日比聖某、甲子のゝ、西國を見めぐる、十一月六日の夜、播州市原村といふ所に宿とりて、医者佐々木某が家とまゝく、接やどりせしに、人ハ今朝より出でゝ、あるじ一人ゐ、妻まうけもてなすこと、ゆゝしき相見す、けゝしくいとゝ今朝とく出るとけハ今ゝ十餘年いかのゝ中なりし、此村より一里ばかりゝ某村村の名きゝ忘れたりと余ふるゝ、といふ所の猟師、甲乙二人つれ山より、朝まだき

草むらに鹿の伏るゝを見つけ、ゆゝしく鳥銃とゝのへ、ちかくうちとゝめ、走りよりてひきゝ、人なり、ゝとまもの猟師の父ふたりなるバ二人大なる疵用まし、ゝなりけ、おゝしゝ、ゝるゝ息絶て、銃丸を一つハうゝ、一丸ゝゝ、ゝめゝ、手跡形ゝ、甲乙いづれのものゝらしといふ、ゝゝ官ゝつげゝ糺問ありしに、実ゝ明ゝ明ゝ二人ゝ罪ゝ免れゝ事ゝゝ、ゝゝ今ゝ村人ゝゝゝゝ

いうなるものとうたがのひしの猟師、あの暁山中みく、ある猟師
の野徒なりと見るやうに、鳥流にて水小死みまく苦先
ていそぶ来りて、支りゆきるふ、近々の医師もきたるつ
きり、ちちぐく手をあ〻療ぐれど、ちるしるひくはのう
死ぬるの、その猟師は又、鳥流みく死るる、十余年前、十一
月六日なる、同じく月同じ日まで同じさまにみく死るるとく、
ちるふ、先年親とうちに、けしみく法ぐるる、今ここ吟ぬに
ちるれるを、あのものはふちるるとく、実よりやまちく

なるれども、親ところ〻天誅、ばるるかくなるるんと、在ちふ
人ぐいひひく、毛髪そびえぬ、ひまり奇なるりなれば
語まやとなるるよ、我もまく身は毛ぐちしと、日比野氏余に
うさらるれ、
○ある〻五月大坂絶波彩地ふ六角力なるしよ、大に名れ近
きにたる盛なるよこうしなり西方小結に、荒馬源治
と云ものと、大坂住いうく外の角力なるもうるるひ、
角力の終り、十日目に当る日早朝に、ひまくまるまり来る、荒馬

をすてゝかちんとゝく、手ぎわ刻木とゝれつさげ、手猿宿にあを
入しよ、荒るゝハ外ふ立くいまぐるゝで、関ゑ柏戸宗五郎ひひひ
荒るゝ合ぎりゝと告くけゝなざめしゝど、聞うけぎゝて
かとあゝ入しゝば、柏戸怒りゝくよもゝの老数人とゝくなげつ
くゝ、手ひいまふ二階ふ上りゝ荒馬を引ひせとゝぐくよのくしり、数
十人つぐゝくのぐり来ゝと、荒るゝの弟子、九十六九と九十六俗称
とゝいゝの年十六、師ふ狼藉なゝとゝい、脇ざゝとぬ弟のぐり
くゝものと切けゝよ、創とゝうゝむゝもゝの十余人、家内騒ぎこと

しゝ、ぐゝく恥なゝもの出きゝり又おれ家にゝる角力ゝりどゝ
ゝもぐゝよゝりちづあ、相手あゝぐゝく退ぬゝくく双方ゝも
官にゝしゝくゝるゝとゝでしゝのゝ九ぐのゝ、我師とゝりきゝりえぐゝしゝら
んゝゝく、狼藉いゝゝゝ立、ぢくゝゝやだい外くく技芸れ師とゝえり
て衣食のゝゝも皆師ふゝりゝ人が師にゝくきゝゝ人とゝ中ものゝ
ゝくゝ人ばふ重く大切の人ゝくゝ、君師れゝゝゝ立むゝとゝえず
数人に傷けゝ、いゝゝふ法去ゝれ仰付らゝゝゝ、悔ゝゝゝなる
づゝゝりゝりゝ、荒馬ゝゝゝ私ゝゝゝ郎ゝゝゝれば、

九と御ひろめのうへ、私ハいろふも罪しまへ、相あの
ものとあぶしをかつよ、ご御れ瓶をこうれうく狼藉に及び
し紙にきこえく、きづけきし者ひろど、九ハ免ごれ申す
ふく、荒馬ひづけ、荒るハ殺れにあづけるひし御ゆ伝
ふ、金後ろかど角く、大坂ろ来ふ人よあるもしひしふ
ろなるものハ、荒馬ハ大阪法かひ、九を十二ケ
國ハ御追放ふ、承るとあるへ、
○大坂ふ名医ハ何ふ村よもある医者某不学拙技を

しれものなれど、多き里ハ蝙蝠なり、ふ年ハ夏霍乱
やんるものと療じく、ふる快復なさしれば、一村ふ
ぞろく奇なりし称誉を、大坂ふ名医者し親しく交り、その
拙技をよくきふ人ひろの事をきく、うれいうなる薬と投
じく、速ろ治ろ、ひやしぶく思ひ、ひれく名医薬
をしに、拙医を氣ハ抑くしく、ふれ名医ハうく病ハ
ふをしきろく、ふふ相應る薬をく療ぞる有よ、治やどをふ
ふなく、かの霍乱ふ病ハ、露舞ろれく、甚ろぐ、ふれ

病なりしが、此の方にて、かの屠蘇散をあたへしに、あれまで新年の祝に用ひ、殊に目出たき薬なる方と病と相応して、忽ち平愈せしなれば、驚絶十分にいつくしみて、向ふ人から驚きあへりしを撫志のび、筋を探くかへしまうしとある人まうかうしと云人まて余まうてあり、

○堺町辺の町にさかある芳野某といへる医師、すぐれてなさけふかく物をあはれむ人なり、家に畜ふ猫ありしが子をうみけるが、いづくへか出てかへらず、子猫は乳にはなれしが、主人死をいたみければ、主人いたはしくおもひて、思ひを焦しけるをぬすみて、つねに此家に来り、食をあたへて生ありけるをとりけるが、ある馴たる牝犬ありて、ありしを見て子猫をすくしけるに、主人いよいよあはれみて、つねに其の所へ行かんと思ひけるに、此犬とび来りて、いつしか我家の猫子とうしなひて後ゆくへしらずなりぬ、いかなる子をすくひて帰らざるにやあるべし、其の子外にて殺害せられしものならん、かくまうしたる事たしかならず、かのやる子猫をやしなひそだてんとおもひしに、

まぶせたり、くくくハさるぐくうつく死ん、ゆるとをとつ
ねこく見ちろ〳〵ようせんくのうゆくくまのびぐさし、そし失ちゐく
恩をちろ、まく道理ともも粗聞ちくく犬獣なり、さんば、和漢と
をつり、そうこふ忠うくく、義犬と称せうるものとくなるべ、
犬と猫とハとうるを仇敵のごくくなるこのまんば、犬を愛記
とうくるものなれバ、義ほうくハその仇ふとくく、猫ば死
法教ふなるべし、今汝ばうをと懐ををるんと推くくの母猫
ば心をうををし、まうくうぶ久〳〵く汝と懐をる恩とをちとば、

子猫ば仕ゆし〳〵成ぜし、飯などをとく、尾〳〵ふぶれたばいつ
ふまく汝ば乳とりちゐ汝こく、手餓死とすく〳〵〳〵ゆくとと
其恩とちる義犬とをとりぶ〳〵ちかと、人に弱〳〵ふぶくいと移ごろ
ふくうと〳〵、ぐ紀ちふ、犬を首とりくちとゐちふる閑入
ちうちに見え〳〵ぶちくハワゲてばときとと〳〵ちのなん
とまぶちうちう、猫の子ちとをとくく、危をなぶ〳〵、犬の乳り
ちし〳〵ちせふ母猫ちりとんゐし〳〵ふや、尾ぶく乳ふちれ乳を、
犬を少も動ぶぶ〳〵くわゐちふ乳とのまちちり乳とく〳〵、こと人

大きなる子猫、けなげ、ばんやく、手傷れ子猫、ちとさつる
に、おとなしくのまやく、ねんごろふかくふむうちなり、そへいもく
はびと、且うしろの男ひとやり手後もかくれでくくくひ犬
うが子し猫のうちに、乳とワうちく為るひとふかどもいこ猫
どもと、食物とひくしやうまべくなりしうば、そふうち乳をやめ飯
まくく、肉かどひくしたのふつぶかく、生こちうち、後ふ為のく人
の此猫どもとくく、うしぶや、此猫ひとる、犬の親よりもと此うち
とひくとくく、人ちろ付、うくく見るふ、手顔なよとる

犬ふ似ちうしふ和ちうしと、おる侯此、京邸の留守の人うる
らんた、

○河内藤阪村の農、某れ田地の中に、方三尺ばかり、ふるだ
草ちうり、昔ちうかくあうしや、其底とちるものなし、ちるも
田を打ちてくくに草ちくぶれ地なりとい、ど、まくる後ちう
いるふ、國土の費なり、ちくる我くくる田地なれば、我ふまう
になさんに、何れそぶる不ちうんやくく、為ぐく手ふもくくと
ひくた、四面と同じく、稲ちうりやうふ、秋雪の時ふいちう、忽然と嵐

数十ばいぐ來り、かの新に墾れし、方三尺ばかの田に生ずる稻、ちりぐく食つくしいづちとなく失きりぬ、これを見聞るに、大にわどろに怪まざるなし、田主はいかもちうちうくて、はまさいりかるえびにもきるんうと、戰き怪それいそだ手地をもものぐくに法にあげ、砌のうみ中なりしうば、程なく前のごとく草むくぞなりるるなりん土人、この艸むくを甫塩といひなくはしくいまなりとて、手村の人うう結る、

○丹後宮津の者人、京師に來て住しみいくりどうく病ず

うの、法のよ聾とかる、生業にくるれ、ためものとえず、大切ず、ちん、牧しれ友のくるる飡客となり、三年をてり、ちれぐ病も飡す、ヒくべなくくまる宮津ようてるるその音声言語まへるりくそる大坂人のぐくにうるくくく、郷里の亦旧ひ、ひるれ、ちゆーくるるり、耳ちいくのちくどりく大阪ふ下をうれば、聞ちりなくべれやうちぐるよいうくくちりーし、ちくん、水上にりくのなるが、十ばりうし、ひる人うくられ、

○伊賀上野より西北三里ばかりくく、月の瀬とりる処あり、

ふかき奥を小山長谷といふ、両色山つゞき、中に一条の
坦地あり、行程凡五里余、山下山上ともに〳〵梅樹つゞきたり、
民屋ところ〳〵にあり、重地耕作に使なれど、ゞ梅とう
へ、及漁をなりわいとす生業とせり、かゝる処に住こと稀
なるべし、おのゝく物さびたる景色見んとゝふ、それもな
とかなるべきうらみなん、

○ある人いとゝく、去る年賀茂祭追儺などゝ、もと
も知ざる人に、詩歌連俳をもとめ、ひまもとめて榮と
し、其需に応ずる人もまた多し、流俗となりて、ひたすら
ゆゑしとおもふいとなり、昔江戸にて、良医ともぶる人の身
まかりしとき、親族及び人相とゝのゝ知るとゝもなる人のうち
なく、ひとよく哀悼の詩などをしるし、或名を紙
其角に俳諧の発句をとゝめ、或人に和歌をこ
ゝろゝく、哀悼の情をつゞくるにたゞしく、辞しるふるく
ふるゝをおし、おちふちひろふぞ、ゆゑのをえど、五月の
ゆゝりなれば、六六尺も力落しの五月雨とゝの句をとゝ

[illegible]、見識あり、圭角なし、[illegible]
讀書人なるを聞伝、その名いまだ[illegible]
[illegible]

○[illegible]老人[illegible]、[illegible]舞妓役者女[illegible]、中村久米
太郎、俳名を鯉丸といふものあり、上手の名[illegible]、上らん夏分
娘[illegible]傾城[illegible]、いづれもその者ふるひ、むかしのものもと
多し、京に在り、その父母は、新宮川町に居住せり、
その住ふ[illegible]を、毎朝劇場にゆき、必ずしも

[illegible]、[illegible]夕[illegible]、[illegible]寒暑風雨のはなはだしき
[illegible]、一日もかく事なく定省す、[illegible]餘は孝養推て知べし、
誠ふかい中にも[illegible]者なるは、感賞すべきなり、
[illegible]、[illegible]上手とは、[illegible]かき、画もよ
く[illegible]、祇園祠の[illegible]絵馬に、関雲長の赤兎にのり、
青龍刀を横へ[illegible]画[illegible]、[illegible]役者の[illegible]
[illegible]、[illegible]人にはしまれ、後[illegible]して賞誉せ
らる、余も[illegible]、[illegible]手[illegible]

れもひとりがけくいさやうなれ人みなくなりしと、ねざめしてこそ
うたがくるしと、せきふ手人ネくなり、又我身をうのうく、
慙愧ふ入ざりた、

○ある人の話ふ、江戸に庚義ふ入ある人あり、書をよくする
をもて名をうり、ある時、他の國に行しふ、田舎の庶ふ名ばか
ぬぬ、一ぜんうどんそ切と出するあるを、立ぐまるて
なぐりの、手をなる、老婆に、古の書を誰が出するやと
ふ、老婆ふくちをくちをうぐ、後くしへ、なぐ〜ぬうだが

名をなるなり、ぬるよりの通りをするものハ、ふくるる、破れ〜雨
ぬれ、形にをうふ、をたをうふ、かなどのものを、
うく人なくふ、うばをぬるの爺とりしるぬなれど、便
ぬ〜くかせ〜ふを、手をとぐ、下地をくあ〜〜のと
ふて、角ぐ手通りと書付〜なるとをうふ、庚子氏大ふ感愛
し、ぬくくそ此書體、まてふ自然の妙をうく、反く、数年
なくひ学びぬるの出ぬぐ爺をあるくのぐれんを
ふく、筆をう学びなば、能書とうぐ侍もいるべし、古

ふぜ我師とたゝぐさくすのうちにくゝ強く乞もとめ多く
銭あるゝへゝ千をとりひれ、人ゝくのち、裾袋しつるよりを
珍重せりとうてれ、
○京師ゑ、松川某しる医ありて和産の草の用ひく、舶来
のくすのハれ用ひど、日本の人ハ、日本の草ゑ生ぐる草といく、病と
療ぐるに道理ちうと遠く唐土ものともちゐハ甚迂闊なる
しく、水土風氣と知ぐるやまりなとつよりしるの、醫
術ぬくべ、ちぐりく切と奏やうるとうる人うるる、因く

思ひひしくのちりいつのちろよ、渡海の舟颱風にあひ、唐土ありく
ういつる余り漂流し、船中の人、重く病ろふ、千石の人くあり
ちるくく、ちめぐいるる、医者と請ぐく診やりん、せるとち
ま、医れいるハ日本の人なんバ、日本のゆとりく、ちの藥とせ
んドりうるるるりんと、日本の水もむべりや な
りとうるくるる一人んきくるるの杯ひつりく、日本より交易
やし、盆梅雪揺などのりりくとくるる日本ゆ土なんバ此土と
流る水なるべ、ゆハ日本ゆめるもくるべるる水とくく、藥と

せんど欣しんいうと、つるよ、扇げみも結くくのうちうの
古と漆るゆくく、茅とせんどけるふ、病ゆるよ卒愈せし
聞しるけりたハそ水而そふうるのすいけるぐ鳴
そうそしく人ゆ、ちう絵とうちゆ事、けうくくくまぐ、
智なりとゆべし、うめうのうけくくうゆぐ、松川氏乃
中さうく、日本の人ゆ、和さのくうるとゆ用べし、古とく
うそくしのものとうそうれゆ、水ゆ風氣とうくるゆ
まりなうくく論ぐうくと、いうゆるうくうる論なうくハ、

いひぐくかるゆべうく、

○高山彦九郎、名正之、上毛新田人なり、全国をうる武よ
いうゆる風俗なうふ、言る山ゆワうく志氣勇敢なり、武のワぐ
にすぐれ、まうく賢能の人と尊敬し、義ゆもいうゆる壮士よ
く、性豪とうの、諸國を経歴し、京師ゆも來うく、余ゆ
人なり、一と癖、高山ゆ江戸に幸しうゆ、服部善義とおいぐ
なりひく、玄嶋よ招びしふ、野ゆのうち戦ゆ里とゆる所ゆう、その
菜庵よ入くいそうんと欲ふ、振弱るうぐゆく、里の名不祥

なり、こぶまるこぶ所おもゝずしてひろ、こるゆみうら矣くかるゆで
これ所こそ所なりよいてもるてもむかと、かなぢいかゆくしらば、矢
立の硯ちりぢし、

いかゝ、陽氏君八治ゆる、ものもつかぬ戯乃里、とゝ
こいぶやゆと、張紙ゆくく、大ま勝ゆ、ぶんひやまゆ、足下の
ゆくゝ感覚ゆ多ありとく、そ家庭よ入ゆうくやもひ
ゆゝ北しとゆ、ゆく、張紙ゆるの、曾ゆの車と猪母ふゝセし
にゆゝぶく、平素の守り為ゆるゆ所思ひやゝゆくいそう古し、